

日本の外国人居住者のコミュニケーションの実態調査の中間報告

Progress report of a survey on real-life communication among foreign residents in Japan

高 民定・村岡英裕 (千葉大学)

Minjeong KO and Hidehiro MURAOKA (Chiba University)

Abstract

As globalization in the society advances, the language environment in Japan has become more and more diverse, reflected by the increasing number of communicative situations in languages other than Japanese. It is obvious that many of the foreign residents in Japan are transnational in nature and this may have affected their linguistic repertoires as well as their awareness on language use. At the same time, it can be expected that there are different types of language management in contact situations that they are currently experiencing and in those situations they experienced in the past marked with strong “contactedness” (cf. Fan 2006). As a pilot study, a survey based on a questionnaire was conducted in order to find out how foreign residents in Japan use and evaluate languages in various types of situations, and what kinds of communication problems they face. Altogether, answers from 35 international students in a university and 28 non-students living in the Tokyo metropolitan area were collected. This report presents the findings related to their language use by looking at how they self-evaluate their Japanese language ability and their linguistic profiles.

1. はじめに

社会のグローバル化に伴い、日本でも言語環境は多様化し、日本語以外の言語使用場面も増えている。それにともない、国境を移動する人々の言語レパートリーや言語意識も変わってきているように思われる。日本に居住する外国人の多くもこうしたグローバリゼーションのなかを移動する人たちであり、こうした人々の言語使用を理解するためには、まず彼らがどのような言語背景を持ち、これまでどのような言語環境で過ごしてきたかを理解する必要がある。また現在の言語使用においては実際どのようなコミュニケーション場面に参加し、どのような発話機能を使い、そこでの自身のコミュニケーション活動をどのように評価し、あるいは問題と感じているかといったコミュニケーションの実態を把握する必要があるだろう。さらにその際、外国人居住者自身による日本語能力の評価が彼らのコミュニケーション場面への参加や、日本語に対する意識にどう影響しているかをみることも今後の日本語教育や移民の言語政策を考える上で重要な手がかりになるといえよう。本論文では、日本における移動する外国人の言語使用と言語管理の諸相をとらえるための予備調査として、異なる言語背景と環境をもつ外国人居住者を対象に、日本でのコミュニケーションの実態に関するアンケート調査を行った。それをもとに本調査に向けた課題を考えていきたい。

2. 日本の外国人居住者の言語使用と言語管理

日本国内での外国人(移住者)の言語使用に関する研究は、これまで社会言語学領域でのコミュニティに関するものが多く、なかでも在日コリアンや在日中国人などのいわゆる言語コミュニティ内の言語意識や言語選択の問題を取りあげた研究が多い(Ogoshi & Hayashi 2003, 真田・庄司 2005 など).

一方、移民言語研究と同様に外国人居住者の言語問題を調査してきた接触場面研究は、言語使用レパトリーの構成の多様さ、言語問題を管理するストラテジーの多元性などの外国人居住者の言語使用の特徴を明らかにしてきた(e.g.村岡 2010). とくに、接触場面研究では外国人居住者が参加する場面に注目し、そこで遭遇する言語問題の詳細を取り上げ、場面参加の意識と言語使用、言語問題の調整との相互作用を明らかにしようとする(e.g.高・村岡 2009, Muraoka, Fan and Ko 2013 など). これらの一連の研究からは多言語使用者の言語選択とコード・スイッチングの機能は彼らが個々のコミュニケーション場面をどのように認識するかによっていることが分かった. また外国人居住者の言語習慣や言語使用に対する評価は多様であり、それは彼らのおかれてきた言語環境や当事者による通時的管理に基づいていることが分かった.

さらに、日本語教育においても外国人居住者の日本語使用や言語問題の多様性をどのようにとらえ、評価しているかを当事者の視点から分析することの重要性が指摘される. マルチリンガルの視点に基づく多言語習得研究や多文化共生のための日本語教育の取り組み、母語話者による評価研究などはこうした背景と流れを反映した取り組みであると言えよう(日本語教育 2008, 宇佐美 2010). 日本の多言語使用者の日本語習得モデルや日本語教育のあり方を考えるためには、外国人居住者の言語環境をとりまく諸要因が日本語使用や意識、評価にどのように影響し、言語使用グループ間でどのような特徴があるかを比較することが必要であろう.

本稿では、このような問題意識に基づき、主に以下の二つのことについてアンケート調査を行い、その中間結果をまとめる.

- (1) 日本での滞在期間と日本語能力の自己評価との関係をもとに3つの評価グループに分け、それぞれの評価グループでは日本語意識や接触場面の参加に対し、どのような特徴があるかを調査・分析する.
- (2) 出身地域での言語環境や習得の状況をもとに、3つの言語使用グループに分け、参加するコミュニケーション場面やそこでの発話機能、コミュニケーション場面に参加をめぐる意識と評価、さらにその場面での日本語使用の意識と習得状況などについて調査を行う. その結果もとに多言語環境で暮らす外国人居住者の場合、その言語使用グループごとにコミュニケーション参加の実態や日本語の使用意識が異なり、また多様であることを検証する.

3. 調査の概要

個別の調査協力者に対する詳細な言語使用調査を行うための予備調査として、出来るだけ多くの外国人居住者(社会人と留学生)を対象に主として日本語によるコミュニケーションの実態を調査する目的でアンケート調査を実施した. 以下、アンケート調査の概要、方法、回答者の概要について述べる.

3.1 アンケート調査の概要

アンケートは以下のように4部に分けた。

第1部：2014年5月から6月の日本語によるコミュニケーション

第2部：来日後のコミュニケーション

第3部：日本語能力と日本語学習

第4部：個人に関する質問

第1部では調査直前の2ヶ月間の経験を内省してもらい、第2部では来日以降の経験のサマリーとして回答してもらった。質問項目は、どちらの部でも、参加したコミュニケーションの場面、場面やそこでの言語能力に対する評価、コミュニケーション機能、参加を回避していた場面など共通している。ただし、第2部では日本語の他言語への干渉、日本語使用時の意識についても聞いている。

第3部では、日本語能力を16項目挙げて、習得の程度を5段階尺度で評価してもらった。また、具体的な学習状況についても質問項目を立てた。

第4部は個人のプロフィールについて質問し、さらに第1言語から第3言語までについてそれぞれの言語能力を4技能にわけて5段階尺度で評価してもらった。

アンケート項目は日本語版、英語版、中国語版、韓国語版を作成し、調査協力者に選んでもらった。紙幅の都合でアンケート用紙の添付はできないが、次節からの分析の際に該当する質問項目については説明する。

3.2 調査方法

社会人の外国人居住者に対しては、千葉市国際交流協会に出向き、2名の方の対面で回答していただいたほか、著者たちの大学に所属する大学院生や元大学院生に協力してもらい、かれらの知り合いに調査を依頼してもらった。ほとんどの場合はアンケート用紙または電子ファイルを送付し、回答してもらった。ただし、中国人居住者6名については未回答を防ぐために対面で答えてもらった。留学生については、千葉大学国際教育センターに所属していた短期留学生、さらに千葉大学文学部留学生委員会が主催した1日バス旅行に参加した留学生に、アンケート用紙を配り回答してもらった。回答数は社会人が28件、留学生が35件であった。

3.3 調査回答者

社会人28名、留学生35名それぞれについて性別、年齢、出身国・地域、第1言語を表1にまとめた。女性が6割、男性が4割であるが、社会人では男性が、留学生では女性が多くなった。年齢については20代が6割弱、30代が3割となるが、社会人では30代が多く、留学生では20代が圧倒的に多い。

出身国・地域では、もっとも多いのが中国で5割、ついで韓国が2割弱となる。2013年末で日本全国での2カ国の国籍の割合(中国籍31.4%、韓国・朝鮮籍25.2%、法務省、<http://www.moj.go.jp/content/001127288.pdf>, 2015年1月31日閲覧)と比べると、今回の回答者では中国出身者がかなり多いのが特徴的と言える。また、全国で3番目に多いフィリピン出身者は1名もない。ちなみに千葉市の外国人居住者では、2014年5月末現在で中国籍45.6%、韓国・朝鮮籍17.9%となり、回答者の出身国・地域に近くなる(千葉市、<http://www.city>).

chiba.jp/somu/shichokoshitsu/kokusai/foreignresidents-201405.html, 2015年1月31日閲覧).

第1言語についてはほぼ出身国・地域に準じている。台湾出身者は中国語が第1言語と回答し、中国出身者のうち3名が第1言語を朝鮮語と回答している。

		社会人	留学生	合計
性別	女性	10	27	37 (58.7%)
	男性	17	8	25 (39.7%)
	NA	1	0	1
年齢	10代	0	3	3
	20代	6	30	36 (57.1%)
	30代	18	1	19 (30.2%)
	40代	2	1	3
	NA	2	0	2
出身国・地域	インド	2	0	2
	タイ	1	3	4
	インドネシア	1	3	4
	ベトナム	3	0	3
	台湾	1	1	2
	韓国	2	8	10 (15.9%)
	中国	16	16	32 (50.8%)
	アメリカ	0	2	2
	その他(3カ国)	1	2	3
	NA	1	0	0
第1言語	タイ語	1	2	3
	インドネシア語	1	3	4
	ベトナム語	3	0	3
	韓国語・朝鮮語	4	9	13 (20.6%)
	中国語	15	17	32 (50.8%)
	英語	1	2	3
	その他(4言語)	2	2	4
	NA	1	0	1

表1 回答者の概要

では、次節からアンケート回答の分析のうち、特徴的な点をかんたんに述べることにする。

4. 日本語能力の自己評価の分析

4.1 日本語能力に対する評価と意識

本節では、調査協力者の回答から彼ら自身の日本語能力についてどのように自己評価して

いるか、そして言語使用においてどのような意識を持っているかをまとめる。

1. 1 留学生が社会人より日本語能力の自己評価が高い

まず、社会人 28 名、留学生 35 名の自己評価の回答を表 1 に示す。アンケートでは、第 1 言語から第 3 言語までの言語能力の自己評価を 5 段階評価(1:ほとんどできない, 2:少しできる, 3:まあまあできる, 4:よくできる, 5:とてもよくできる)で回答してもらった。社会人のうち、10 名が何らの情報不足であったが、そのうち 4 名については推測が可能であったため評価ありとして算出した。留学生については 2 名が未記載であった。

日本語評価	社会人	留学生	合計
5	1 (3. 6%)	3 (8. 6%)	4 (6. 3%)
4	3 (10. 7%)	14 (40. 0%)	17 (27. 0%)
3	11 (39. 3%)	12 (34. 3%)	23 (36. 5%)
2	4 (14. 3%)	1 (2. 9%)	5 (7. 9%)
1	3 (10. 7%)	3 (8. 6%)	6 (9. 5%)
NA	6 (21. 4%)	2 (5. 7%)	8 (12. 7%)
合計	28 (100%)	35 (100%)	63 (100%)

表 2: 日本語能力の自己評価

今回の調査協力者については、社会人の自己評価の中心は評価 2 から 3 あたりにあるのに対して、留学生では評価 3 と 4 の間にあり、留学生のほうが評価が高いことがわかる。

本節では、上の自己評価の高さにしたがって、4 と 5 の高評価グループ(21 人)、3 の中評価グループ(23 人)、1 と 2 の低評価グループ(11 人)に分けることにする。

4. 2 どの自己評価グループでも日本語規範への志向が高い

アンケートでは日本語使用においてどのような意識があったかを 7 つの項目で、5 段階の尺度(1:ほとんどなかった, 2:あまりなかった, 3:わからない, 4:ときどきあった, 5:よくあった)で回答してもらった。7 つの項目はそれぞれ以下の通り。

- a. 日本語がスムーズに出てこないことがあった,
- b. 日本語らしくない日本語を使ったという意識をもつことがあった,
- c. 日本語とほかの言語を切り替えて話すことがあった,
- d. 自分で日本人が使わない日本語をつくることがあった,
- e. ほかの外国人や同国人が使っている日本語に影響されることがあった,
- f. 自分の日本語を日本人の日本語に近づけようとする意識があった,
- g. 自分らしい日本語を使おうとする意識があった。

回答は 3 つのグループに分け、項目ごとに回答者数で割った平均値を出してみた。社会人と留学生とも全体として回答は類似している。a「スムーズに出てこない」、b「日本語らしくない日本語を使った」、f「日本人の日本語に近づける」で高く、d「日本人が使わない日本語を作った」、e「ほかの影響」、g「自分らしい日本語」で低い。つまり、日本語規範を志向する意識が高いことが示唆される。

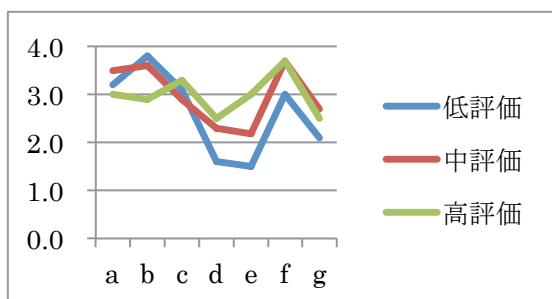


図 1: 社会人における言語意識

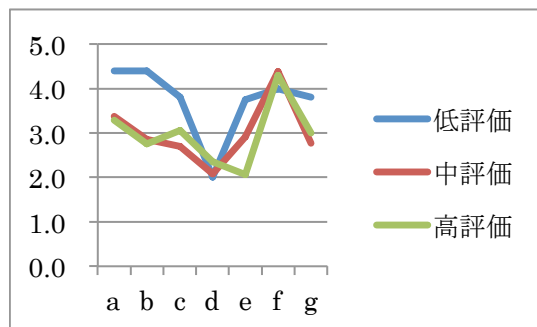


図 2: 留学生における言語意識

では、自己評価の違いはどのような点に現れているだろうか。2つの図を見ると、社会人では b, d, e, 留学生では a, b, c, e, g で差が大きい。どちらにも共通して差が大きいのは、b「日本語らしくない日本語を使った」と e「ほかの影響」である。

ただし、社会人と留学生とで3グループの意識の違いは異なる。留学生の低評価グループの b 回答の高さからは日本語習得の初期段階の人々が含まれていることが示唆される。また、e では、日本人以外のネットワークが多いのは、留学生の低評価グループと社会人の高評価グループである。

4.3 来日時期と参加場面

第2節では、コミュニケーション外の要因として来日時期および参加場面が3グループごとに、どのように異なっているかを見ていく。調査協力者の属性(第1言語, 出身国)についてはとくに社会人データに偏りが大きいいため自己評価という観点からは取り上げないものとする。

(1) 留学生の場合のほうが来日時期は自己評価に関連している

来日時期の回答には、年だけのものと年月を記入したものがあつたが、ここでは年に統一する。したがって、2013. 12 と記入した回答は 2013 となる。来日時期については社会人 28 名中 1 名が未記載であった。留学生 35 名で未記載はない。来日時期は 2 年ごとに区切り、回答者数が少なかった 90 年代、80 年代についてはそれぞれ 1 つのカテゴリーとした。表 3 は留学生、表 4 は社会人である。

来日時期 / 日本語評価	80's	90's	2000-2001	2002-2003	2004-2005	2006-2007	2008-2009	2010-2011	2012-2013	2014
5								1	1	1
4		1				1	3	1	8	
3								3	9	
2									1	
1									3	
NA								1	1	

合計	0	1	0	0	0	1	3	6	23	1
----	---	---	---	---	---	---	---	---	----	---

表 3：留学生における来日時期と日本語能力自己評価

表 3 を見ると、来日 3 年以内(2012-2014)が留学生 35 名中 24 名(68. 6%)で、もっとも多い。この 3 年以内の留学生の特徴は、日本語能力の自己評価が 1 から 5 まで広がっていることにある。来日 3 年以上(90 年代～2011)11 名では評価は 3 以上となり、そのうち 8 名が評価 4 また 5 で、評価 3 は 3 名しかいない。つまり、滞在期間が 3 年以上になると自己評価も高くなるのがわかる。ただし、留学生 35 名で 3 年以上の滞在者は文系の学部か大学院の正規学生であり、学習・研究で日本語能力を要求される言語環境にある。

来日時期/ 日本語評価	80's	90's	2000- 2001	2002- 2003	2004- 2005	2006- 2007	2008- 2009	2010- 2011	2012- 2013	2014	N A
5		1									
4	1						1	1			
3			1	5		4			1		
2						1			3		
1									2	1	
NA					2		3				1
合計	1	1	1	5	2	5	4	1	6	1	1

表 4：社会人における来日時期と日本語能力の自己評価

社会人の回答(表 4)を見ると、来日 3 年以内(2012-2014)の者が 7 名(25%)、来日 4 年以上の者が 20 名(71. 4%)となる。来日 3 年以内の 7 名では自己評価 1 か 2 が 6 名で、低評価に集中している。一方、来日 4 年以上の 20 名では評価 3 が 10 名おり、そのうち 6 名は滞日 14 年から 11 年(2000 年から 2003 年)の長期滞在者である。しかし 80 年代の 1 名、90 年代の 1 名では評価 4、5 と高くなる。よって、社会人 28 名の場合には日本語能力の自己評価はゆっくりとしか上昇しないか、中程度の評価 3 に留まる可能性が示唆される。

(2)参加場面の私的ネットワークの発達の有無が自己評価と関わっている

参加場面に関する回答を見てみる。アンケートでは「来日してから今までよく参加したコミュニケーション場面を a~l の 12 の場面から複数回答可で選択してもらった。

- a. 対面での買い物,
- b. 交通機関,
- c. 2 人以上での食事,
- d. 趣味・サークル,
- e. 仕事・勉強,
- f. アルバイト,
- g. 日本人の友人とのつきあい,
- h. 日本人以外の友人とのつきあい,
- i. 近所づきあい,
- j. 子育て・幼稚園,
- k. SNS,
- l. その他

図 3 は、社会人 28 名のうち、記載のあった 22 名について、グループごとにどの程度の割合で各場面に参加しているかを示している。低評価グループ 7 名では、参加場面の割合が低い。とくに g. 「日本人の友人とのつきあい」、h. 「日本人以外の友人とのつきあい」、i. 「近所づきあい」、k. 「SNS」といった私的ネットワークの回答がなかった。

高評価グループ 4 名と中評価グループ 11 名では、この順で多くの場面で差が見られるが、やはり g, h, i, k で差が大きい。つまり自己評価の違いは、私的ネットワークの発達の違いと関連していることが示唆される。

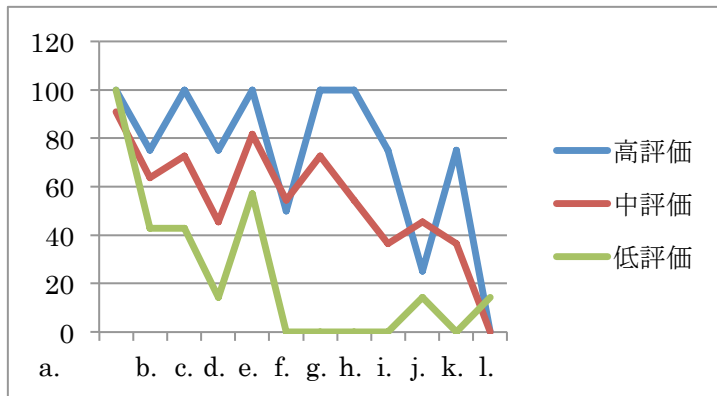


図 3：社会人の日本語能力の自己評価 3 グループべつの参加場面の参加率(%)

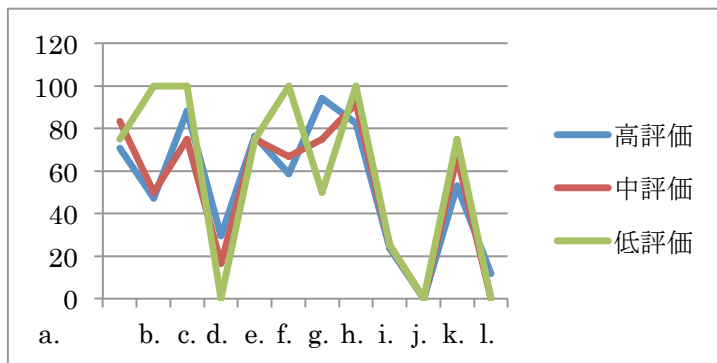


図 4：留学生の日本語能力の自己評価 3 グループべつの参加場面の参加率(%)

一方、留学生 35 名について同様にまとめたのが図 4 である。中評価と高評価のグループのグラフは、社会人の場合と類似した傾向を示している。ただし、h. 「日本人以外の友人とのつきあい」に関しては、社会人の中評価グループが参加率が下降するのに対して、留学生の場合には逆に上昇している。低評価グループ 4 名については社会人の低評価グループと異なっており、g. 「日本人の友人」、h. 「日本人以外の友人」のネットワークについても、むしろ留学生の中評価グループのほうが近い。つまり、留学生の低評価グループは留学生として私的ネットワークを形成する機会を得ているが、来日 2 年以内の人々ばかりであるために自己評価が低いのだと解釈できるだろう。

4. 4 高評価グループは多言語化している

最後に前節で扱ったよく参加する場面においてどの言語を選択したかを見てみる。アンケートでは前節と同じ 12 場面について複数回答可で、何語を使用したかを答えてもらった。3 グループごとに集計し、回答を日本語、英語、第 1 言語、第 2 言語に分類し、その間の割合を示したのが、表 5 と表 6 である。

社会人	日本語	英語	第1言語	第2言語
高評価 4名	29 (56. 9%)	8 (15. 7%)	10 (19. 6%)	4 (7. 8%)
中評価 11名	68 (71. 6%)	10 (10. 5%)	17 (17. 9%)	0 (0%)
低評価 7名	9 (52. 9%)	7 (41. 1%)	1 (5. 9%)	0 (0%)

表 5: 日本語能力の自己評価 3 グループごとの言語選択の割合(社会人)

まず表 X の社会人についてみると、高評価グループと中評価グループでは、日本語と英語の選択の割合に差がある。高評価グループでは英語の割合が増え、第 2 言語の選択もあるため、日本語選択は 56. 9%に留まっている。一方、中評価グループでは、日本語選択は 71. 6%まで上昇する。ちなみに、高評価グループ 4 名の第 1 言語は、ベトナム語、中国語、韓国語、朝鮮語であり、来日前には必ずしも英語を第 2 言語として使用してきたとは思われない。低評価グループでは、第 1 言語選択がほとんど報告されなかったが、記入が全体として少なく、信頼性が低い。

留学生	日本語	英語	第1言語	第2言語
高評価 17名	104 (61. 2%)	28 (16. 5%)	37 (21. 8%)	1 (1%)
中評価 12名	67 (69. 1%)	7 (7. 2%)	23 (23. 7%)	0 (0%)
低評価 4名	8 (24. 2%)	18 (54. 5%)*	7 (21. 2%)	0 (0%)

表 6: 日本語能力の自己評価 3 グループごとの言語選択の割合(留学生)

*低評価グループのうち、1名(N34)は第1言語が英語であるが、ここでは英語使用に算入した。

つぎに表 6 を見ると、留学生でも、高評価グループと中評価グループの傾向は社会人の場合と類似している。他方、低評価グループについては英語選択の割合が 5 割を越えており、留学生の英語能力の高さ、または留学生間の英語使用ネットワークが示唆されている。

留学生の高評価グループは 17 名おり、最大グループであるが、社会人の高評価グループ 4 名と同様の傾向になっていることから見ると、高評価と中評価のグループのこの傾向は、一般性が高いと言えるかもしれない。つまり、高評価グループでは、英語選択の割合が比較的に高い一方で、日本語選択の割合は 5 割から 6 割に留まる。中評価グループでは英語選択の割合が低いために、日本語選択の割合は 7 割前後まで高くなる。

4. 5 本節のアンケートの分析結果から考えるべき 2 つの課題

以上、自己評価の 3 グループについて、日本語の使用意識、来日時期、参加場面、言語選択の割合を見てきた。今後の調査の課題をまとめる。

(1) 外国人居住者が位置づけられている社会的ネットワークの違いが自己評価の違い、ひいては日本語習得の違いにかかわっていることが予想される(1. 2)。日本語が要求される言語環境をもつ留学生に比べると、社会人では自己評価が低くなる。さらに社会人において低・中評価グループは高評価グループよりも私的ネットワークが発達していない(2. 1, 2. 2)。つまり、留学生、社会人高評価グループ、社会人低・中評価グループ、の順に日本語を使用する言語環境に参加していないように思われる。

また、一般に社会的ネットワークは移民を位置づけるとともに移民によって位置づけられるものとして考えるならば、移民自身がどのように自分の置かれたネットワークをとらえていくかについても調査する必要がある。とくに社会人の中評価グループは長期滞在者に多く、ネットワーク調査が重要であろう。

(2) ネットワーク調査の重要さは、3種類の接触場面への参加の仕方との関係でも意味がある。高評価グループの英語選択の割合の高さは、彼らが第三者言語接触場面に参加することが多いことを意味している(2. 3)。そのなかには日本語使用による日本語非母語話者との第三者言語接触場面も含まれる。高評価グループが接触している第三者言語接触場面のネットワークの参加者とはどのような人々であり、そこから高評価グループが何を受け取っているかを調査することは彼らの言語レパトリーを考察する上で有効であると思われる。他方、中評価グループ、低評価グループについては、日本人との日本語使用による相手言語接触場面のネットワークと、第1言語による内的場面のネットワークと、自己評価の関連をさぐることができる。3つのグループの言語レパトリーの多言語化の実態が、こうした接触場面との関連で解明できるように思われる。

5. 言語使用グループのコミュニケーションの実態分析ⁱ

5.1 調査協力者の言語使用グループ分け

本節では、一連の研究から日本の外国人居住者を出身地域での言語習得と現在の言語使用の状況をもとに以下の4つの言語使用グループに分けた。

- (1) 出身地域では単言語中心だが、日本では母語(第1言語)と日本語の2言語を主としてしようするグループ A-1
- (2) 出身地域では単言語中心だが、日本では主として日本語や英語などを含む多言語を使用するグループ A-2
- (3) 出身地域では多言語使用者で日本では主として母語と英語の2言語のみを使用するグループ B-1
- (4) 出身地域では多言語使用者で日本でも主として母語と英語の他に日本語を含む多言語を使用するグループ B-2

具体的には、アンケートの第4部の「個人に関する質問」の回答での調査協力者の言語プロフィールをもとに、まず来日前の出身地域の言語環境が単言語中心社会であるか多言語中心社会であるかで A と B の二つのグループに分けた。その後、来日後の個人の言語使用状況をもとに、母語と日本語の2言語使用中心であるか、2言語以上の多言語使用中心であるかでさらにそれぞれのグループを A-1, 2 と B-1, 2 に分け、全部で4つの言語使用グループにした。その際、多言語使用グループに関しては、自己報告による言語使用の状況だけではなく、アンケートにおいて、母語以外の2言語使用場面が2カ所以上になっているかどうか判断の基準にした。また A-2 グループと B-2 グループは現在の個人の言語使用状況からすると、どちらも多言語使用者であることには共通するが、A-2 の場合は、日本語が第2言語となっており、言語能力の自己評価も第3言語の英語と比べ、高いか同等のものになっている。それに対し、B-2 のほうは、日本語は第3言語となっており、言語能力の自己評価も第2言語の英語より低い。

また各言語使用グループの出身地域を見てみると、グループ A は、韓国と中国の地域から

の人が多く、その他にタイ、ベトナムなどの出身者がいる。Bグループは、インドネシアをはじめ、インド、ギリキス、モンゴル、中国の朝鮮族自治区からの出身者となっている。詳細は前節の表1を参照されたい。

本稿では言語使用の傾向を分析することを目的としているため、今回は4つのグループのうち、それぞれのところで特に回答者が多かったグループA-1とA-2、B-2の回答だけを分析の対象とした。分析においては留学生と社会人に分け、それぞれの言語使用グループにおけるコミュニケーション参加の状況や日本語の使用を含む言語使用の意識を分析した。

グループ	留学生	社会人
グループ A	A-1(留) ⁱⁱ 20名	A-1(社) 13名
	A-2(留) 10名	A-2(社) 4名
グループ B ⁱⁱⁱ	B-1(留) 2名	B-1(社) 該当者なし
	B-2(留) 3名	B-2(社) 5名

表7 調査協力者の言語使用グループの分類

5.2 留学生の場合

5.2.1 言語使用グループA-1(留)

(1) 来日後から最近までのコミュニケーション場面の参加

ここではアンケートの第1部の来日以降のコミュニケーションと第2部の最近におけるコミュニケーションの参加を聞く質問に対する回答をもとに分析を行った。二つのコミュニケーション場面の参加の状況から言語使用グループA-1(留)が来日後にもっとも多く参加していたコミュニケーション場面は、g「日本人の友人とのつきあい」(14.1%)で、その次にa「対面での買い物」(13.0%)、c「2人以上での食事」(11.8%)の順になっている。またその場面で使われた発話機能をみると、g「日本人友人とのつきあいの場面」とc「2人以上での食事」では、⑦「おしゃべり」の発話機能がともに多く使用され、a「対面での買い物」では①「挨拶」と⑨「質問」の発話機能が多用されている。それぞれのコミュニケーション場面で必要とされる発話機能が使われていると言える。逆にグループA-1(留)において、使用頻度が少なかった発話機能には、⑥「謝罪」と、⑩「情報収集」、④「指示」であったが、これらの発話機能は「謝罪場面」や「研究場面」のような特殊の場面において使われるものであるだけに今回はそういう場面に参加したとの報告はなく、そのことがアンケートの結果に影響していたと考えられる。一方、コミュニケーションを避けている場面については、全体として回答者が少ないものの、回答の中にはh「日本人以外の友人とのつきあい」(30.7%)、i「近所のつきあい」(15.3%)のようなネットワーク形成に関わる場面を避けていると答えた人が多かった。その理由については、「敬語を使う答えが面倒くさい」や「敬語に自身がない」、「日本語で通じないから」という日本語の問題が理由としてあげられた。

	最近参加したコミュニケーション場面(「最近」)	来日後よく参加したコミュニケーション場面(「来日後」)	合計	回避したコミュニケーション場面(「回避」)
a. 対面での買い物	20	15	35(13.0%)	2(15.3%)
b. 交通機関	16	8	24	0
c. 2人以上での食事	16	16	32(11.8%)	0
d. 趣味・サークル	7	5	12	0
e. 仕事・勉強	18	13	31	1
f. アルバイト	15	15	30	1
g. 日本人の友人とのつきあい	20	18	38(14.1%)	0
h. 日本人以外の友人とのつきあい	14	16	30	4(30%)
i. 近所づきあい	5	6	11	2(15%)
j. 子育て・幼稚園	0	0	0	1
k. SNS(e.g.	14	11	25	1
l. そのほか	1	0	1	1
合計	146	123	269	2

表8 A-1(留)の参加したコミュニケーション場面と回避したコミュニケーション場面

(2) (日本での)コミュニケーションの参加における意識と評価

ここではアンケートの第1部での参加したコミュニケーション場面についての困難や自己評価、日本語の使用時の意識に関する質問の回答をもとに分析を行った。その結果、言語使用グループA-1(留)がコミュニケーションの参加に困難を感じていた場面(以下「困難」)は、g「日本人の友人とのつきあい」(30.1%)と、a「対面での買い物」(15.3%),f「アルバイト」(15.3%)の順であることが分かった。なかでももっとも困難を感じていた場面としてあげられた、g「日本人の友人とのつきあい」については、「日本人との距離感が把握しにくい(N5)^{iv}」、「日本人はすごく距離感を感じさせる(N10)」との理由があげられている。a「対面での買い物」場面では、「従業員(従業者)の敬語が多すぎて理解しにくい(N5)」や、「レジで支払う時にレジ袋は必要かどうか聞かれた時に、係員の話すスピードが早すぎて答えに迷った(N6)」などの理由があげられた。f「アルバイト」でも「バイト用語がわからなくて(N14)」や「アルバイトで敬語をよく使うが、敬語が分からなくて(N17)」の理由があげられた。このことから母語と日本語の2言語中心の言語グループ(留)の場合、日本語のスピードや敬語の使用がコミュニケーション場面の参加において問題になっている可能性がうかがえた。一方、自己評価がもっとも高かった場面(以下「自己評価」)は、f「アルバイト」(26%)とg「日本人の友人とのつきあい」(26%)で、その次がc「2人以上での食事」(約17%)であった。とくにf「アルバイト」の場面の評価が高かった理由としては、「敬語がうまくなった(N14)」があげられており、これは上であげたコミュニケーションが困ったときの理由にもなっている。コミュニケーションの仕方や日本語の使い方を多く意識していた場面(以下「意識」)としては、e「仕事・勉強」(40%)やf「アルバイト」(35%)で、なかでもこれらの場面での言葉遣いを意識したと答えた人が多い。このことからやはりこの言語使用グループのコミュニケーション参加の場面における日本語使用の意識の高さがうかがえる。A-1(留)グループのコミュニケーション場面の意識に関する詳細は以下の表9と図5の通りである。

場面	「困難」	「自己評価」	「意識」
a	2(15.3%)	1	0
b	1	0	0
c	1	4(17.3%)	0
d	1	0	0
e	1	0	8(40%)
f	2(15.3%)	6(26.0%)	7(35%)
g	4(30.1%)	6(26.0%)	2
h	1	3	0
i	0	1	0
j	0	0	0
k	0	2	2
l	0	0	1
合計	13	23	20

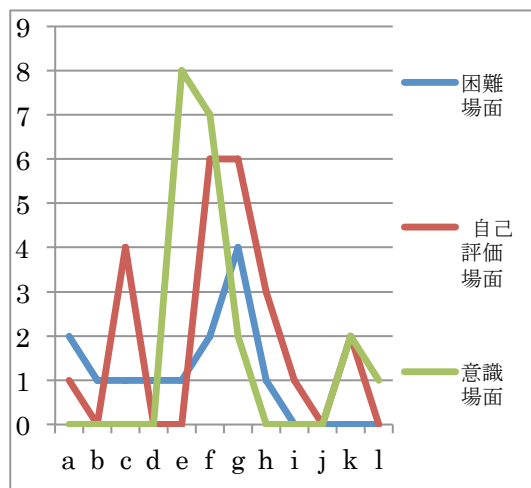


図 5

表 9 A-1(留)コミュニケーション参加状況

(3) 日本語使用の意識と習得状況

ここでは、アンケートの第2部の来日後から現在までの日本語を使用するときの意識を、5段階の尺度で示してもらった結果と、第3部の日本語能力に関する5段階の尺度の自己評価の結果をもとに分析を行った。日本語使用の意識については、上記の4.2でも述べているように7つの項目について意識の状況を調べた。7つの項目の詳細な内容は4.2を参照されたい。5段階の尺度のうち4「ときどきあった」と5「よくあった」の回答が多かった意識の項目は、f「自分の日本語を日本人の日本語に近づけようとする」とg「自分らしい日本語を使おうとする」で、それぞれ90%と33.1%の割合となっている。詳細は下記の図2の通りである。この結果だけを見ると、言語使用グループA-2(留)の場合、日本語の使用時の意識として日本語の規範を強く意識する傾向と、自分らしさを出したいという意識もあるように思われる。しかし、g「自分らしい日本語を使おうとする」の意識のところでは、2「ほとんどなかった」と回答した人も3割ほどおり、またb「日本語らしくない日本語を使ったという意識があった」の項目でも2「あまりなかったと」を答えた人が25%もいるので、全体としては自分らしさを出すよりは日本語の規範を強く意識する傾向にあると言えるだろう。

一方、日本語能力の習得の程度に関する自己評価については、日本語能力の項目について習得度の早さを5段階(1:とてもおそかった, 2:おそかった, 3:どちらとも言えない, 4:はやかった, 5:とてもはやかった)で評価してもらった。一番回答が多かったのは、3「どちらともいえない」で全体の41.1%を占めており、自己の日本語能力の習得をまだ評価しない人が多いと言える。ただし、4「はやかった」の評価をしていた人も31.9%となっており、5「とてもはやかった」の評価と合わせると、日本語の習得度を肯定的に評価した割合は46.2%となり、日本語の能力については全体として自己評価が高いと言える。日本語能力別の評価を見ると、5と4の評価が多かった項目は②「聞く」と⑤「あいづち」で、反対に1と2の評価が多かった項目は⑫「改まったストラテジー」、⑮「日本人の冗談の意図」、⑯「話題の広がり」、⑰「会話の始め方」となっている。これらの項目に対する評価の回答からはA-1(留)の今後の日本語でのコミュニケーションにおける問題や習得課題を考えることができるだろう。

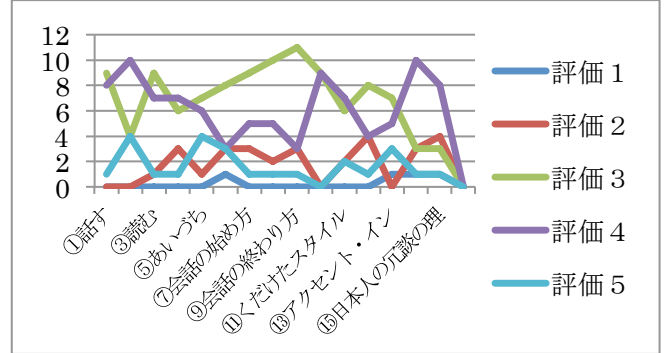
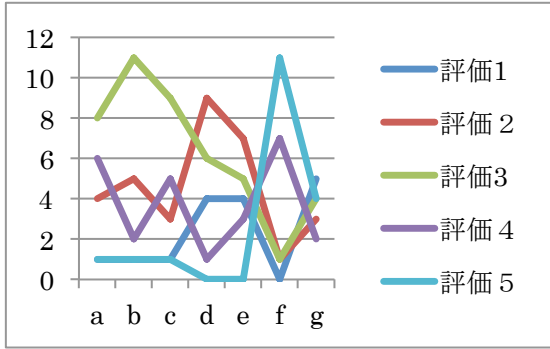


図6 日本語の使用意識に関する自己評価 (%) 図7 日本語能力の習得度の自己評価 (%)

5.2.2 言語使用グループ A-2(留)

(1) 参加したコミュニケーション場面と発話機能

今回のアンケートで言語使用グループ A-2(留)に分類された調査対象者は 10 名しかおらず、回答の数はグループ A-1(留)に比べると少ない。まずコミュニケーション参加場面においては、来日してから最近まで参加が多かった場面は、h「日本人以外の友人とのつきあい」(13.5%)であった。これは A-1(留)が見せた参加場面の傾向と異なる結果で、多言語使用を中心とするグループの特徴の一つであるといえるだろう。その次に多かったのは、e「仕事・勉強」と g「日本人の友人との付き合い」の場面で、それぞれ 12.7%と割合となっている。またこれらの参加場面で使用した発話機能は、⑦「おしゃべり」(19%)、①「挨拶」(14%)、③「相談」(11%)で、対人関係に関わる場面だけにそれに関連する発話機能の使用が目立つ。一方、日本語でのコミュニケーションを避けていた場面に関する質問には、全体として参加を回避したとの回答は少なかったが、f「アルバイト」の場面では日本語能力の問題から場面の参加を回避したことが 2 件報告されている。A-2(留)のコミュニケーション参加状況に関する詳細は表 10 と図 8 の通りである。

	最近参加	来日後	回避
a	8	7	1
b	8	7	0
c	8	8	1
d	4	2	0
e	9	8	0
f	4	4	2
g	9	7	0
h	9	9	1
i	2	2	1
j	0	0	0
k	8	7	0
l	2	1	0

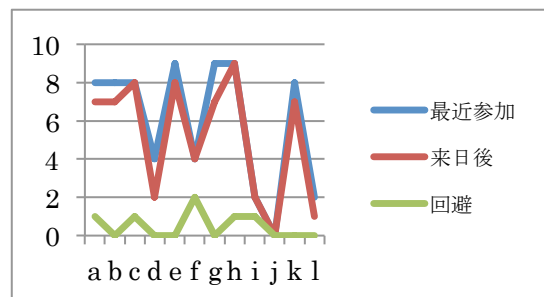


表 10 A-2(留)のコミュニケーション参加状況 図 8

(2) (日本での)コミュニケーション時の意識と評価

困難を感じていた場面については、g「日本人の友人とのつきあい」をあげた人が 50.0%

でもっと多かった。その理由としては「自分の日本語の能力の問題」(N11)をあげたり、「日本人と話す時に話がズレたりする」(N21)ことや、「ことばが通じない」(N15)などの理由があげられている。一方、自己評価が高かった場面は、h「日本人以外の友人とのつきあい」の場面で、その理由としては、「日本語のレベルが同じなので、間違っても気にしない」(N3)ことや、「相手も外国人だから自信があり、英語も使える」(N24)があげられている。このことからこのグループにおいては日本語の使用を意識しなくてもいい状況や、多言語が使用できる状況が場面の評価に影響していることがうかがえる。またコミュニケーションの仕方や日本語の使い方でもっとも意識している場面を聞く質問に対しは、e「仕事・勉強」(38.4%)と g「日本人の友人とのつきあい」(30.7%)をあげており、とくに g「日本人の友人とのつきあい」は、困難を感じる場面での回答でもあげられており、言語問題と言語意識の関係がうかがえる。回答の詳しい結果は以下の表 11 と図 9 のとおりある。

	困難	自己評価	意識
a	1	1	0
b	0	0	0
c	0	0	1
d	0	0	0
e	1	1	5(38.4%)
f	2	0	1
g	4(50.0%)	1	4(30.7%)
h	0	5(50.0%)	0
i	0	1	1
j	0	0	0
k	0	1	1
l	0	0	0
合計			

表 11 A-2(留)コミュニケーション参加状況

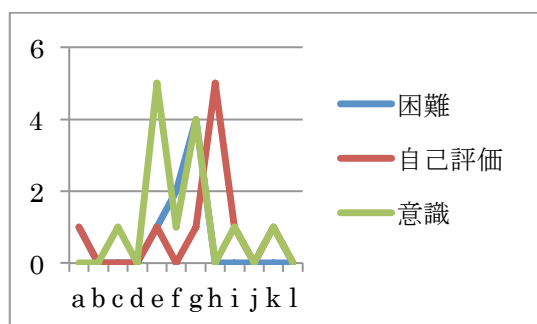


図 9

(3) 日本語の使用意識と習得状況

日本語を使用するときの意識については全体として「分からない」と答えた人が 40.3%でもっとも多い。この言語グループの場合、多言語使用を中心としていることから、c「日本語と他の言語を切り替えて話す」という意識が高いと予測されたが、今回の回答の結果からはそれほど高くないことが分かった。ただし、f「自分の日本語を日本人の日本語に近づけようとする」意識があったことや、g「自分らしい日本語を使おうとする」意識があったという回答が多いことから言語使用グループ A-1 と同様に日本語使用や習得に対する意識は高いと考えられる。また日本語能力の習得の程度については、全体として 4「はやかった」との評価が多いが、①「話す」、⑥「話題の広がり」、⑭「日本人の意図の理解」と⑮「日本人の冗談理解」については習得が「おそかった」との回答が多く、全体として自己評価が低い傾向にあることがうかがえた。

5.2.3 言語使用グループ B-2(留)

(1) 参加するコミュニケーション場面と発話機能

言語使用グループ B-2(留)に分類された調査協力者は3名で、来日してから多く参加していた場面は、a「対面場面での買い物」(13.9%)、c「2人以上の食事」(13.9%)、h「日本人以外の友人とのつきあい」(13.9%)で同じ割合になっている。これらの場面で主に使用された発話機能は、⑤「説明」や⑨「質問」、⑦「おしゃべり」、③「相談」であり、参加している場面に必要な発話機能が使用されていることが確認できる。言語グループ B-2は出身地域で多言語を使用する環境にあり、日本でも日本語を習得しながら、出身地域で使った多言語も使用している。彼らが参加するコミュニケーション場面で主に使用した言語は、母語と英語、または母語と日本語の2言語、さらには母語と英語、日本語3言語になっている。コミュニケーションを避けていた場面については、このグループでは回答が得られていなかったため分析は省略する。

(2) (日本での)コミュニケーション時の意識と評価

困難を感じていた場面についての回答は全体として少ないが、それぞれ、a「対面での買い物」、e「仕事・勉強」、f「アルバイト」があげられた。またもっとも自己評価が高かった場面も困難を感じていた場面と同じ回答になっている。さらにコミュニケーションの仕方や日本語の使い方をもっとも意識した場面についても e「仕事・勉強」の場面のみがあげられた。理由としては、「ゼミや授業での発表では話し言葉よりちょっと正式な場面だと意識してできるだけ書き言葉で話すようにしている(N31)」をあげており、フォーマルな場面での日本語の使い方を意識していることがうかがえる。

(3) 日本語の使用意識と習得状況

言語使用グループ B-2の日本語の使用意識については、f「自分の日本語を日本人の日本語に近づけようとする意識があった」という回答がもっとも多い。他には c「日本語と他の言語を切り替えて話す」ことがあげられており、多言語使用の環境にあることが確認できる。また自身の日本語能力の習得度に関する質問には、全体としてどの習得項目も4「はやかった」(43.1%)と回答しており、なかでも、⑥「話題の広がり」や⑦、⑧の「会話の始め方と終わり方」、⑭「日本人の意図の理解」、⑮「日本人の冗談理解」の項目において習得度の自己評価が高いことが分かった。とくに⑤「あいづち」においては5「とてもはやかった」との高い評価をしている。逆に評価度が低かった項目としては、③「読む」、⑬「アクセント・イントネーション」になっている。これらの結果は、B-2(留)グループの日本語の習得課題としてただちに一般化することはできないが、彼らが会話を中心とする習得を意識していることや、またそれに関する習得項目を課題とする意識があることは言えるのであろう。

5.3 社会人の場合

5.3.1 言語使用グループ A-1(社)

(1) 参加したコミュニケーション場面と発話機能

言語使用グループ A-1(社)の場合、来日してから、また最近参加したコミュニケーション

場面は、b「交通機関」(14.4%)、f「アルバイト」(14.4%)、h「日本人以外の友人とのつきあい」(13.2%)であった。参加したコミュニケーション場面において多く使用された発話機能は、⑦「おしゃべり」(27.4%)、⑨「質問」(16.9%)、①「挨拶」(14.7%)だった。また e「仕事・勉強」の場面では、多様な発話機能が見られており、同じ場面での発話機能も一番多く見られた。逆に参加場面として多くあげられた b「交通機関」と、h「日本人以外の友人とのつきあい」のところでは、使用された発話機能の回数が少なく、しかも偏っていることが分かった。日本語でのコミュニケーション参加をもっとも避けていた場面の回答では、a「対面での買い物」と h「日本人以外の友人とのつきあい」がそれぞれ 21.4%となっている。とくに h「日本人以外の友人とのつきあい」は彼らが多く参加している場面であると同時に、回避する場面にもなっていることが分かった。

(2) (日本での) コミュニケーションのときの意識と評価

困難を感じている場面については、f「アルバイトや」と h「日本人以外の友人とのつきあい」をあげた人がそれぞれ 19%でもっとも多かった。これに対し、g「日本人友人とのつきあい」に関しては 4.7%と低い割合となっており、留学生の A-1 が「日本人の友人とのつきあい」を困難な点としてあげているのと対照的である。一方でもっと自己評価が高かった場面は、b「対面での買い物」(16.7%)と e「仕事・勉強」(16.7%)で、困難を感じていた場面と回答された f「アルバイト」場面については自己評価が 4.1%で低いことが分かった。またコミュニケーションのときに日本語の使用をもっとも意識していた場面についてもやはり f「アルバイト」の場面となっており、全体の 25%を占めている。上の困難を感じていた場面の結果と合わせると、f「アルバイト」の場面は社会人である A-1 にとってはコミュニケーション問題が起こる場面として認識されている事が分かった。

(3) 日本語の使用意識と習得状況

日本語を使用するときの意識について、言語使用グループ A-1(社)は、b「日本語らしくない日本語を使った」という意識と、d「自分の日本語を日本人の日本語に近づけようとする」意識に対し、4「ときどきあった」と、5「よくあった」と回答した人が多く、その割合は両方を合わせると 60%以上になっており、言語使用グループ A-1(社)の日本語の使用意識の一面がうかがえる。日本語能力の習得については、全体として、2「おそかった」と 3「どちらともいえない」がそれぞれ 33.8%でもっとも多い。4「はやかった」の評価をしている人も 20.6%もいるものの、このグループの場合、全体として日本語習得に関する自己評価はまだ不十分であるという認識が強いと言える。

5.3.2 言語使用グループ A-2 (社)

(1) 参加したコミュニケーション場面と発話機能

言語使用グループ A-2(社)が来日後、最近においてよく参加したコミュニケーション場面は、a「対面での買い物」(11.6%)と e「仕事・勉強」(11.6%)、g「日本人の友人とのつきあいの場面」(11.6%)となっている。また場面に応じて多様な発話機能が使われており、とくに e「仕事・勉強」においては、仕事上に必要な様々な発話機能が使用されていることが分かった。A-1(社)とともに仕事の場面における多様な発話機能の使用は留学生のところ

では見られない特徴であるといえよう。一方、言語使用グループ A-2(社)がコミュニケーション参加を避けていた場面は非常に少なく、3カ所のみでの回答になっている。

(2) (日本での)コミュニケーション時の意識と評価

もっとも困難を感じていたコミュニケーション場面は A-2(社)がもっとも多く参加していた場面と同じである。そのうち e. 仕事・勉強の場面では、仕事上で必要な対応などがうまくできないことを困難であると感じる理由としてあげている。一方、最も自己評価が高かった場面については、c「2人以上での食事」や、g「日本人の友人とのつきあい」、i「近所づきあい」で、どれも対人関係に関する場面で、対人関係に関わる自己の行動を高く評価していることが分かった。コミュニケーションの仕方や日本語の使い方をもっとも意識していた場面に対しては、回答が非常に少なく、対面での買い物場面と趣味サークルの1カ所ずつのみであった。このグループに入っている調査協力者の場合、主にタイ、ベトナムからのもので、出身地域の母語の他に英語と日本語の多言語を日常的に使用している。こうした社会人多言語使用者の場合、仕事の場面以外は困難を感じている場面と日本語の使用を意識している場面が少なく、日本語の使用をめぐる意識が強かった留学生の A-1 グループと比較すると日本語使用意識はそれほど強くないと言える。

(3) 日本語の使用意識と習得状況

日本語を使用するときの意識としては、「日本語らしくない日本語を使っている」や、「自分の日本語を日本人に日本語に近づけようとする」、「自分らしい日本語を使おうとする」が4「ときどきあった」の評価となっている。一方で、「日本語と他の言語を切り替えて話す」ことがあったかの質問に対しては、2「あまりなかった」と3「分からない」と回答しており、多言語使用やコード・スイッチングに関する意識は強くないことがうかがえた。また日本語の習得状況に関する自己評価では、評価の対象の全項目に対し、4「はやかった」との回答が多く、なかでも⑧「会話の終わり方」と⑩「コミュニケーションストラテジー」において高い自己評価をしている人が多いことが分かった。それに対し、1「とてもおそかった」と2「おそかった」と自己評価が低かった項目は、⑥「話題の広がり」、⑦「会話の始め方」、⑮「日本人の冗談の理解」となっている。このことから言語使用グループ A-2(社)は日本語の会話の進み方を意識しており、特に話題の展開に関する能力は彼らにとって習得の課題として認識されてしていることが考えられる。

5.3.3 言語使用グループ B-2 (社)

(1) 参加したコミュニケーション場面と発話機能

言語使用グループ B-2(社)に分類された調査聴力者は5名で、来日後から現在まで全体として幅広い場面に参加していることが分かった。なかでも参加の回数が多かったのは a「対面での買い物」(16.9%)と b「交通機関」(12.9%)、e「仕事・勉強の場面」(12.9%)であった。また参加するコミュニケーション場面での発話機能としては、⑤「説明」、⑨「質問」、⑩「情報収集」など仕事の場面に関係する発話機能が目立つ。とくに興味深いのは他のグループでは見られなかった、⑥「謝罪」の発話機能も8%見られ、社会人としての特徴が現れている。一方コミュニケーション参加を回避した場面に関しては、c「2人以上で

の食事」の場面と j「子育て・幼稚園」の場面があげられている。その理由としては、2人以上での食事の場面では、「複数の人との会話に参加することは難しい。更に日本人がいるともっと難しい」(N124)ことがあげられている。j「子育て・幼稚園」の場面を避ける理由としては、「トラブルの防止」があげられた。これらの特徴は一部の人だけに見られるものとはいえ、このグループの人たちが抱える問題の一面をうかがわせていると言える。

(2) (日本での) コミュニケーション時の意識と評価

困難を感じている場面については、c「2人以上での食事」と g「日本人友人とのつきあい」があげられた。その理由としては「会話に参加するのが難しい」(N124)などがあげられている。もっとも自己評価が高くなった場面は、a「対面での買い物」と b「交通機関」がそれぞれ 25%の割合となっている。その理由としては、「No pressure when using Japanese」(N109)や、「listening announcement from announcer」(N111)があげられている。またコミュニケーションの仕方や日本語の使い方をもっとも意識していた場面を聞く質問には、回答者が少なく、「対面での買い物」、「仕事・勉強」、「2人以上での食事」、「子育て・幼稚園」の場面がそれぞれ 1 件ずつとなっている。その理由としては、交通機関の場面の場合は「announcement uses good structure of sentences」(N111)という理由が、また仕事の場面の場合は、「It is a formal situation」(N109)が、日本人との付き合いの場面については、「日本人は難しい。無難に接したい」(N124)の理由がそれぞれあげられている。

(3) 日本語の使用意識と習得状況

日本語を使用するときの意識としては、a「日本語がスムーズに出ていこないこと」や、c「日本語を他の言語と切り替えて話す」、f「日本語らしくない日本語を使ったという意識があった」があげられている。また、d「自分で日本人が分からない日本語を作ることがある」や、e「他の外国人や同国人が使っている日本語に影響される」ことがあるかについては、ほとんど意識されていないことも分かった。一方、言語使用グループ B-2(社)の日本語の習得状況を見てみると、全体としてどの習得項目に対しても 4「はやかった」と評価しており、⑨「会話の終わり方」と⑩「コミュニケーションストラテジー」においては、もっとも高い評価となっている。それに対し⑥「話題の広がり」や⑦「会話の始め方」に関しては、習得が 2「おそかった」と評価している。こうした日本語の使用や習得に関する意識は、上で述べた(2)困難を感じているコミュニケーションの場面とも関係しており、合わせて言語使用グループ B-2(社)の現在の言語使用状況や習得の課題がうかがえる。

5.4 本節のアンケートの分析から考えるべき課題

本節では出身地域での言語状況と現在の言語使用状況に基づき、2言語中心と多言語中心の言語使用グループに分け、それぞれの言語使用グループに見られるコミュニケーション参加の状況と日本語使用の意識などを分析した。その結果、それぞれの言語使用グループについては以下のことを今後の課題として考えることができた。

5.4.1 2言語中心の言語使用グループ

(1) 参加するコミュニケーション場面と場面に対する意識は平行する。

日本語と母語の2言語の使用を中心とする留学生グループがもっとも多く参加する場面は、「日本人の友人とのつきあい」場面であったが、この場面は同時に彼らがもっと困難を感じている場面であり、また自己評価の高い場面でもあることが分かった。さらにはその場面での日本語の使用意識も高い。言い換えるとこの結果からは2言語使用グループのコミュニケーション場面の参加が日本語使用の管理が一つにつながっている可能性がうかがえる。またこれらの傾向は留学生のほうに強く見られており、2言語中心の留学生のコミュニケーションの特徴の一つである可能性も考えられる。一方、社会人の2言語使用グループの場合、「アルバイト」や「日本人以外の友人とのつきあい」の場面への参加が多く、これは彼らにとって困難を感じる場面でもあり、同時にその場面における日本語の使用意識が高い場面でもあることが分かった。ただし、自己評価においては困難を感じる場面とは違う場面があげられており、留学生の2言語中心の言語グループの傾向と異なっていることが分かった。

(2) 日本語規範への意識が高い

日本語能力の習得度に関する自己評価が高く、同時に日本語使用において日本人の日本語の使い方に近づきたいという意識がどの言語のグループより高く、全体として日本語の規範意識が高いと言える。日本語の使用意識に関しては社会人の場合も同様であるが、日本語能力の習得度に関する自己評価のところは、留学生のほうは自己評価が高いのに対し、社会人の場合、不十分であるとの評価が多く、同じ言語使用グループであっても言語的・社会的環境が異なることで自己評価も異なっていることが分かった。

5.4.2 多言語使用中心の言語使用グループ

(1) 参加する場面と発話機能が多様である。

多言語使用中心の言語グループの場合、参加するコミュニケーション場面が多様で、またそれぞれの場面で使った発話機能も2言語使用グループに比べ、多様である。とくにh「日本人以外の友人とのつきあい」の場面の参加が多く見られた。また留学生も社会人もコミュニケーション場面の参加を回避することは少なく、コミュニケーション参加が積極的であることがうかがえる。

(2) 困難を感じる場面と自己評価の場面は平行しない。

多言語使用を中心とする言語グループは、困難を感じる場面と自己評価が高い場面、また日本語の使用を意識する場面が必ずしも平行しない。例えば、このグループにとって、「日本人以外の友人とのつきあい」は留学生と社会人ともに自己評価が高い場面となっているが、「日本人の友人とのつきあい」については、高い割合で困難を感じる場面となっており、日本語使用に関する意識も異なる。

以上の調査結果により日本における外国人居住者は出身地域や個人の言語環境によってコミュニケーション参加の諸相やそこでの日本語の使用意識が異なることが一部検証できた。ただし、今回の調査では回答者の人数などがグループ別に偏っており、言語使用の傾

向を考える上で決して十分なものではなかったことも事実である。今後の研究においてはデータを増やし、さらに言語使用グループ別の分析を行うことでその枠組みの有効性を検証していく作業が必要であろう。

参考文献

- ファン, S.K. (2006). 接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題 国立国語研究所編 日本語教育の新たな文脈—学習環境, 接触場面, コミュニケーションの多様性- アルク pp.120-141.
- 高民定・村岡英裕 (2009). 日本に住む中国朝鮮族の多言語使用の管理—コード・スイッチングにおける留意された逸脱の分析—, 言語政策 5, 日本言語政策学会 pp.43-60.
- 国立国語研究所編(2008). 日本語教育年鑑 2008 年版 くろしお出版
- Ogoshi, Naoki and Hayashi, Tooru.(2004). The use and awareness of language and their change among Korean residents in Japan "From the survey results at a South Korean ethnic school". Attitudes to language use in a multi-cultural setting: a report on questionnaire surveys of Korean/Japanese and Turkish/German speakers. ELPR Publication Series, Osaka Gakuin University.
- 真田信治・庄司博史編 (2005). 事典日本の多言語社会 岩波書店.
- Muraoka, Hidehiro, Fan, Sau Kuen and Ko, Minjeong.(2013). Ethnographic analysis of evaluation diversity in language management: A methodological consideration for the study of migrants in societies of early globalization. Third International Language Management Symposium, Charles University, Prague, 13-14 September 2013.
- 村岡英裕 (2010). 接触場面におけるコミュニケーション—日本に住む外国人の言語管理を通してみた言語問題の所在—. 日本語学 29(14), pp.153-169.
- 宇佐美洋(2010). 実行頻度からみた「外国人が日本で行う行動」の再分類—「生活のための日本語」全国調査から— 日本語教育 144, 日本語教育学会 pp.145-156

ⁱ 本研究では各言語使用グループの回答結果の割合を分析し、表とグループにまとめているが、本稿では紙面の関係上、表とグループは留学生グループ A-1 のみ提示する。

ⁱⁱ A-1(留)と A-1(社)の (留) と (社) はそれぞれ留学生と社会人のことを意味する。

ⁱⁱⁱ 社会人を対象にしたアンケートでは、調査協力者の言語環境の記載がない回答もあり、その場合、本節の分析の対象から外した。

^{iv} 本稿における N5 は協力者番号を指す。